勝福寺寺報　ひびき　第93号
2019年 4月1日

お念仏と共に　～　如来に念じられて生きていこう　～

報恩講御斎

＊今年のお味はいかがだったでしょうか？

左上から順に、お煮しめ。煮豆。ミカン・柿。大根なます。卯の花酢和え。ご飯。粕汁。

昨年、私たちは古希を迎えた。その記念にと、子や孫たちと連れだって屋久島に遠征し、縄文杉に会ってきた。体力的には少々不安だったのだが、これが我が人生での最後だと思うと、不思議と力が湧いてきた。

この一月、歩みの会が上映した『カノン』の映画会場で「めざそう！第九〈中津〉」のチラシをもらった。中津で、ベートベンの交響曲第九番「合唱」を歌おうというのだ。一度は歌ってみたいと思っていた「合唱」である。ちょっと躊躇したが、これも、人生最後と思い参加することにした。

古希を迎え、人生の最後を思うようになったら、なぜか、日暮らしが明るく、力強くなってきた。

人はみな　死ぬと思えば　なつかしき

という言葉を聞いたこともある。たしかに最後に立てば、垣根が低くなり、だれもが悲しみを抱えて歩く「御同朋」と感じられてくる。

村上慶範先生は「人の世に　生まれて　生きて　生かされて　南無阿弥陀仏になりました」という言葉を遺された。

私も、南無阿弥陀仏の私となっていこう。

発行：真宗大谷派響流山勝福寺　〒879-0471宇佐市四日市1426 TEL 0978-32-1806　ホームページ;kouruzan-shoufukuji.com

大悲を生きる

平野喜之先生

勝福寺報恩講
2019年1月26、27日

一　大悲に出遇う

大悲とは

『浄土論註』に「慈悲に三縁あり。一つには衆生縁、これ小悲なり。二つには法縁、これ中悲なり。三つには無縁、これ大悲なり」とあり、大悲とは如来の慈悲心のことです。

鈴木大拙先生は、「大悲」をunconditional love（無条件の愛）と訳されました。そして、「大悲」の「悲」をcompassion（共に苦しむこと）と訳されています。

また、安田理深先生は、「苦しみを共にするということが宗教の解脱なのです」と言われています。したがって、私は、「大悲」を無条件の愛、共に苦しむことと理解することにします。

新美南吉の世界

昨年、一昨年と話をさせていただいたことの繰り返しにもなるんですが、南吉が29歳で亡くなる直前に、最後の力をふりしぼって書いた「狐」という作品から読み取れる世界は、「わが子が狐になったら、自分も狐になろう」という母親の心が、大悲の世界であり、南吉からすれば、母親の心と出会った場所が浄土です。「その母親の心が、私となって私を呼んでいた。だから、私は母親を恋焦がれたのだ」となります。

南吉にとって、私となった母親は「隣る人」と言っていいのでしょう。

二　宿業と使命

岩崎　航さんの世界

進行性筋ジストロフィーという病とともに生きてきた岩崎さんは、17歳の時に死のうと思ったけど、「このまま自分が死んでしまったら、自分は何のために生きてきたんだろう」という問いが湧き上がってきた。そしたら心の底から、「このままでは死にたくない」という気持ちが湧いてきたんです。

Sさんとの出会いによって、宿命に向かい合っていかなければならないことを教えられ、絶望から希望を紡ぎだす一つの光源になった。難病という宿命（宿業）を通して、岩崎さんは、自分と同じように苦しんでいる人の傍らに寄り添って生きたいという使命を持たれました。

宿業を引き受け使命を生きる

宿業を引き受ける主体である法蔵菩薩が誕生した時、使命が生まれてきたのです。使命を持って生きるその歩みが、「衆生を仏道にいたらしむる」はたらきをするのです。このように、宿業を引き受けることのできる自己を獲得して使命を生きられた無数の人たちの人生を、光り輝く華として荘厳した世界が浄土なのです。そしてその浄土から、我々一人ひとりが「あなたもそういう人生を歩んで欲しい」と願われているのです。

三　苦しみは渇愛に縁って起こり、空しく過ぎない人生（満足）は本願との出遇いから始まる。

「本願力にあいぬればむなしくすぐるひとぞなき」という和讃を、「本願力にあえば、どんな人も空しく過ぎない人生が始まる。つまり、人生に本当の満足が得られる」と、私はこのように理解したいと思います。「今まで何回も生まれ変わってきたとしても、この生が最後の生であればいい」と言い切れるほど満ち足

2019年報恩講の準備の様子を紹介します！ ①

お飾りも終え、あとは皆さんの参詣を待つばかり

お花立て
風さん、悪戦苦闘中

お華束モチ　　棒で伸ばし、
大小二つ、丸く型抜きします

今年は若い人も参加してくれました

りた生を生きているか？　では、どのような出来事があれば、もう生まれ変わりたいと思わないほど、この人生は満ち足りるのだろうか？　このことを『１００万回生きたねこ』という絵本に見ていきたいと思います。

１００万回生きたねこ

この話のあらすじは、主人公のねこは飼い猫で、飼い主が、「王様」、「船乗り」、「サーカスの手品使い」、「どろぼう」、「ひとりぼっちのおばあさん」、「小さな女の子」と次々にかわりますが、ねこはどの飼い主もきらいでした。その都度、死んで、１００万回生き返りました。

そして、あるとき、ねこは野良猫になりました。ねこははじめて自分のねこになりました。ねこは自分が大好きでした。立派な虎ねこだったので、どんなめすねこもみんなおよめさんになりたがりました。ところがたった一匹、ねこに見向きもしない白い美しいねこがいました。宙返りをしたり、「おれは１００万回も死んだんだぜ」といって気をひこうとしましたが、白いねこは「そう」と言ったきりでした。

ある日、白いねこに「そばにいてもいいかい」とたずねました。白いねこは「ええ」と言いました。ねこは白いねこのそばにいつまでもいました。白ねこは、かわいい子ねこをたくさんうみました。ねこは、白ねことたくさんの子ねこを自分よりもすきなくらいでした。

無条件の愛の世界

白ねこは、ねこをたすけたのです。つまり、ねこは今まで「好き」とか「嫌い」という世界しか知らなかったのですが、白ねこに会って初めてそういう好き嫌いでない世界にふれた。つまり、無条件の愛の世界（大悲）にふれたのです。だからこそ、「いっしょに生きたい」「やっといっしょに生きていけるねこに出遇った」という思いが湧きおこったのです。

生まれ変わる必要のない出遇い

ある日、白いねこはとなりでしずかにうごかなくなっていました。ねこは１００万回なきました。ある日のお昼、ねこはなきやみ、白いねこのとなりでしずかにうごかなくなりました。ねこはもうけっして生き返りませんでした。

さて、皆さんはもう一度生まれ変わりたいでしょうか。それとも、生まれ変わる必要のない出遇いがもうすでにあったでしょうか。

実は、私は生まれ変われるものならば生まれ変わって、また別の人生を生きてみたいなと正直なところ思います。しかし、それはこの人生に満足がなかったからではありません。偶然ではありましたが、児玉先生やいろんな方と、そしてその方たちの道を求める心と出遇うことができました。もしそれがなかったら、私の人生は満足だったとけっして言えなかったでしょう。

どうか皆さん、そして私自身もですが、どんなつらい人生が待ち受けていたとしてもけっして恐れずに、命が完全燃焼するような人生を聞法精進によってどうか勝ち取られますように！

皆さん三年間有難うございました。

聞き書き担当者感想）

今回は、スライドを使って「１００万回生きたねこ」の細やかな眼の表情の変化まで見せていただきました。「無条件の愛」の南吉の世界、宿業を引き受けて使命に生きる岩崎さんの世界にひきかえ、多くの有難い出遭いをいただきながら、どこまでも自己中心の人生です。聞法精進を続けるしかない身を生きさせていただいております。

平野先生三年間ありがとうございました。

南無阿弥陀仏　　釈和敬

2019年報恩講の準備の様子を紹介します！　②

御斎の出来あがり

包丁はトントン、口はペチャクチャ．ああ、楽し！

朝のミーティング。まずは当番の方の自己紹介。

初日の朝は雪でした。当番の皆さん、ご苦労さま。

ご門徒さんこんにちは！ 第十五回

「氷点下人と魚で篤くなる」

上城義信（山香町）

春が来て　まずは城下
さくら鯛

この俳句は勝福寺の門徒さんである上城義信さんの作品です。

上城さんは、県職員として豊後高田市にある浅海海業試験場や佐伯市の県水産試験場に勤務され、かれいやマダイそしてハマグリなどの研究をしてきました。

県を退職後は、魚礁関連の会社の指導者として勤めていましたが、あるとき、県庁の先輩でもある日出町の町長さんから「日出の城下かれいを増やして欲しい」と声がかかり、絶滅が危惧されていた城下かれいの増殖に日出町の職員になって取り組み始めました。

先ず最初に、海の調査をしてみると底が荒れていて、かれい等のえさ場になるアマモが全く生えてないことが分かり、アマモを種から育て、海底に植え付ける環境作りから始めました。

当初、町長から2年程という話が、やり始めると2年では時間が足りず延長、延長の繰り返しで都合12年間になりました。そんな努力が実り、アマモが復活し、かれいの漁獲量が増えるとともに、後継者も育ち、目処が付いたので目出度く今年3月末で引退するそうです。

その上城さんが魚に関心を持つようになったきっかけを尋ねると、子供時代におじいさんに連れられていった魚取りや近所の魚取り名人のおじさんの影響が大きいそうです。

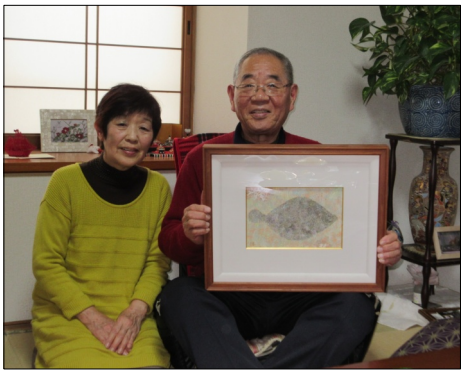
上城さんは、豊後高田市田染で育ちました。でも生まれは朝鮮半島で一九四〇年5月に生まれ、まもなく79歳です。警察官だった父親は、終戦の時にシベリアに抑留され、亡くなりました。そのためお母さんは、上城さんを頭に3人の子供を連れて日本に帰ってきました。

日本に帰ったお母さんは、田染にある自分の実家に子供を預けましたが、その後再婚されたため、上城さん一人だけがおじいさん夫婦に育てられました。

上城さんのおじいさんは、大分県警の幹部職員、そして終戦後、別府市の助役をしていましたが、すぐに辞められ田染に引き上げました。そのおじいさんが上城さんの人生に大きな影響を与えました。

上城さんの横で、ニコニコしながら座っている1歳年下の幼なじみでもある奥さんは本耶馬渓町の出身です。父親が警察官だったため、転勤が多かったそうです。その二人を結びつけたのはおじいさんでした。上城（旧姓は永松）さんに「お前は上城に行け」という指示があり、当時、大阪の魚市場に勤めていたのを退職して帰り結婚しました。そして翌年、県の水産業改良普及員として採用され、かれいとの付き合いが始まりました。

奥さんに、「ご主人の情熱はどこから来るんですか」と訪ねると「海でも魚でもなんでも好きなんです」と笑いながら答えてくれました。佐伯時代は単身赴任だったり、研究に取りかかると没頭して研究所に寝泊まりすることが多く、家にいる時間が少なかったそうです。そんな父親を子ども達は、父親がどんな仕事をしているのか、わからなかったそうです。


お気に入りのカレイの絵も一緒に

勝福寺とのご縁は、四日市の上町に家を建てた昭和48年、上城さんには3人の子供さんがいました。その当時、亡くなられた老院さんが子供会の世話をしており、勝福寺に子供と一緒に奥さんが行きだしたことから始まりました。

現在、上城さんは山香にに住んでいますが、それは、四日市の家が道路建設のため移転しなければならなくなり、今の地に引っ越しました。その家から10年以上毎月1回、朝早く日出の魚市場に行ってかれいなど魚の調査と観察をしています。その時の様子を詠んだのが冒頭の俳句です。

そして、上城さんにはもう一つ大事にしている趣味があります。それは走ることです。宇佐市走ろう会のお世話を長年しながら、北は青森から南は沖縄、そして韓国慶州の市民マラソン大会に参加しており、フルマラソンの経験もあるそうです。昨年膝を痛め、今は休んでいますが、それまでは毎朝10km以上走っていました。

今回5月の上山奉仕研修に奥さんが参加することから、上城さんも一緒に行くことになりました。道中、上城さんにいろんなお話しを聞くのを楽しみにしています。

最後にタイトルの俳句は上城さんの最新作です。意味は上山の車中等でお尋ね下さい。

（文責　渡辺　重昭）

御遠忌委員会だより

三月二十日に、第九回御遠忌委員会が開催されました。
少しずつですが御遠忌の骨格が決まってきております。

事務局長　渡辺和義

御遠忌法要

恵信尼公七百五十回御遠忌

・日時 … 11月23日（土）
（午前）
・法要 … 音楽法要
・記念法話…渡辺愛子先生
（午後）
・記念イベント…琵琶演奏
奏者・桜井亞木子さん？
・パネルディスカッション
「出会おう、語ろう、今ここで！」

親鸞聖人七百五十回御遠忌

・日時 … 11月24日（日）
（午前）
・法要 … 伽陀・表白・散華・勤行（正信偈・念仏・和讃）
・記念式典 …
テーマ作品発表
勝福寺史発表・講話など
（午後）
・寸劇
・記念法話 … 狐野秀存先生

＊御斎については、みんなが参加出来るよう、23、24両日とも、お弁当を取り、お汁だけ手作りする。

テーマ作品の募集

①募集する作品の種類
随想（御遠忌テーマに寄せて）
作文（テーマは自由）
絵、書、写真、
短歌、俳句、川柳、詩、
手芸（パッチワークなど）
工芸、その他

②応募資格・条件
・作文は、小・中・高生対象で、原稿用紙2～3枚。希望する児童生徒には推薦図書を渡します。
・随想は原稿用紙2～5枚

③ 応募締め切り……9月末

④ 参加者には参加賞を贈呈

＊その他、詳細については、別途チラシを作り配布する。

これからの勝福寺のあり方について

1　規則改正について

現行は「響流山勝福寺総代会規則」で、総代会及び常任委員会の役割について定めているが、今後は「響流山勝福寺運営規則」と改め、総代会だけでなく、教化事業全般（婦人会・子ども会・ひびき編集委員会など）を規則の中に位置づける。

2　会計の公開について

報恩講、春・秋季彼岸会法要で、門徒さんから頂く本山納金と御法礼の収支については、これまで、総代会において、残余金を勝福寺一般会計へ繰り入れると報告してきたが、今後は使途がより明確になるように、以下の方向で検討していく。

①法要残余金と本山納金を別にする。

②法要残余金を扱う会計を一般会計から独立させ、法要会計（仮称）とする。

③法要会計の使途については、教化事業に充てるとともに、年度ごとに決算し、残余金は新たに作る「本堂営繕積立金」に繰り入れる。

＊　1、2については、今後「案」を作成し、総代会で決定することとしています。

荘厳工事について

三十年前の内陣修復の際にやり残していた荘厳類の修復をするとともに、お幕障子や襖など痛みが激しいものの修復もすることにする。

主な修復
・中尊前瓔珞（ちゅうそんぜんようらく）・中尊前面燈（めんとう）
・中尊前上卓（うわじょく）・祖師前空殿（くうでん）
・祖師前瓔珞・祖師前面燈
・お幕障子（まくしょうじ）・本堂襖（ふすま）など

＊なお、修復にかかる経費については、皆さまから頂いた「永代経御懇志」の積み立て金をあてる予定。

勝福寺史編纂

現在、資料を整理中です。作成の段階に入れば、皆様に写真の提供や思い出等の執筆をお願いすることがあるかと思います。その時はよろしくお願いします。

お待ち受け聞法会 後半十回が始まる

第11回　1月12日（土）
講師　田畑正久先生
講題「お念仏のこころを尋ねて」

第12回　2月9日（土）
講師　村田和樹先生
講題「清浄なるもの」

第13回　3月9日（土）
講師　伊藤 元 先生
講題「宗祖の問い」

＊法話要約が出来てます。ご希望の方はお申し出ください。また、ホームページでも閲覧出来ます。

二〇一九年の報恩講を振り返って

藤谷純子

お寺の報恩講を勤めることができて、ホッとしています。当番地区であった皆さんには大変ご苦労様でした。

報恩講は、お寺にとって一番力の入るお勤まりです。なぜかというと、恩徳讃（おんどくさん）に歌うように、阿弥陀如来様のご恩、大悲のお念仏を教え導いてくださった人々のご恩に謝し、新たにはりのある生活を始めようとする元気をいただく法要だからです。

と言っても、難しいことではありません。ご法話やナムナムガールの歌やダンスもよかったけれど、報恩講の目玉は、なんと言ってもおいしいお斎にあります。今年のお味はいかがでしたか？ 当番は、寺山、新町、東新町、中津地区でした。日ごろはお寺に参らない人も、仕事などをやりくりして参加してくださいました。若い人が入ってくださるととても元気が出てきます。新しい人の感想を聞きましたのでご紹介します。

＊ 久しぶりだったけど、皆が協力的でやりやすかったです。みなさんとってもにぎやかでしたね。

＊ メニューは評判いいですね。先輩方の傍で、どうやるのか見られてよかったです。でも早くって、あっという間にできてしまうので、おぼえられません。よく習いたいです。

＊ いろいろな人の顔が見られて、新鮮な出会いの場所でした。雰囲気がよかったですよ。

＊ 慣れている人がそれぞれの処（ところ）にいて、よくお世話してくださったので、とてもしやすかった。長い伝統があって引き継がれてきてるのだなと感じました。楽しかったです。

＊ 初めてだったので難しかったけど、皆に優しく教えてもらいながらできました。大変だったけど、おもしろかったです。

慣れない台所でのお斎作りやお給仕など、くたびれたことでしょう。ご苦労様でした。

長年お斎作りを荷負って下さった麻生さん、美佐子さん、そして香田さんから「もう世代交代したい」との声も聞きましたが、「坐って教えてくれるだけでもいいから、来られる間はお願いします」と、お頼みしました。

二〇一一年3月11日　あれから8年
今年も 勿忘の鐘」を撞きました

私たちは、年月が経つうちに、何事もなかったかのような日暮らしをしています。だからこそ、3月11日のことは胸に刻み、大事にしていかねばならないと思うのです。

今年も、三月十一日の午後、勝福寺の本堂に集まり、亡くなった多くの命を追悼して読経と焼香をしました。続いて、四日市別院の鐘楼に移動し、14時46分のサイレントとともに一人ずつ「勿忘（わすれな）の鐘」を撞（つ）きました。

その後、本堂に戻りNHKテレビで放送された「黒い津波」を見ました。

湾内に蓄積していたヘドロが津波によって巻き上げられ、真っ黒な津波が人々を襲っていく姿は水俣病を連想させるものでした。原発事故といい黒い津波といい、大地からしっぺ返しを受けていることを思い知らされました。

春季彼岸会 並びに 降誕会法要

日時　四月七日（日）
　　昼席（一時半）
　　夜席（七時半）
　　四月八日（月）
　　昼席（一時半）
講師　川村妙慶先生

この度、上町地区で使われていたプラスチックのお斎用お椀を寄付していただきました。軽いし扱いやすいし揃っているので美しいです。ありがとうございました。

編集後記

今回のインタビューの中で、上城さんの詠まれた俳句を息子さんは「お父さんの俳句はみんなお酒と関係あることばかりだね」と笑いながら感想を述べたそうです。和やかなその場の様子が目に浮かぶようです。

五月の上山でまたお会いするのを楽しみにしています。

渡辺　重昭